

# 定年退職期の自我同一性に関する研究\*

岡 本 祐 子\*\*\*\*・山 本 多 喜 司\*\*\*\*

## A STUDY ON EGO IDENTITY IN RETIREMENT PERIOD

Yuko OKAMOTO, AND Takiji YAMAMOTO

The purposes of this study were to clarify the differences of retirement experience from the viewpoint of ego identity crisis and to investigate the factors related to them. In Study I, psychological influence of retirement and the way to deal with it were analyzed by giving the SCT to 220 men. The following seven Retirement Recognition Types were found: A: The Active-Welcomer, B: The Passive-Welcomer, C: The Neutral, D: The Crisis, E: The Resigned, F: The Escaper and G: The Ambivalent. These seven types were classified into four Marcia(1964)'s Identity Statuses. In Study II, the correlation between the above statuses and 1. the achievement level of psychosocial tasks in Erikson (1950) and 2. the ego functions was investigated. It was clarified that The Identity Achiever (The Active-Welcomer) achieved psychosocial tasks better and had better functioned ego in comparison with the other statuses. These psychological traits implied the ability to recognize crises and the way to resolve them leading the "reorganization of ego identity".

Key words: adult development, identity crisis, identity status, reorganization of ego identity, retirement.

### 問 題

Erikson (1950) によれば、自我同一性の獲得、達成は、青年後期の課題であるが、個々人の自我同一性は、その後の成人期においても、さまざまな心理・社会的変化を契機に問い直され、再吟味されて、さらに成熟していくものと考えられる。青年後期に獲得された自我同一性が、以後どのように変化するか、あるいは変化しないのかという問題は、いまだ明らかではなく、わずかに Donovan (1975a, b), Marcia (1976) ら、青年期の同一性ステイタス研究によって、問題提起ないし示唆されているにすぎない。

一方、成人発達 (Adult Development) に関する研究によっても、青年期以降の成人期は決して平坦なものではなく、心理的、社会的な変化のおこりやすい時期があることが指摘されつつある (Gould, 1978; Levinson, 1978; Lowenthal, 1975; Vaillant, 1977)。自分の内外の変化にともなう、自分のあり方を改めて問い直し、今後の人生の再方向づけを行うことを、「自我同一性の再体制化」と呼ぶならば、その契機となるできごとは、成人期においても数多く存在する。

例えば、中年期が、危機的な時期であると言われることが多いのは、体力の衰え、子供の成長や巣立ちによる家族構造の変化など、自分の内外の変化がこの時期に集中しておこりやすいからであろう。さらに、それらの変化を契機に、これまでの人生の見直しと将来へむけての軌道修正が行われることが多い (武則, 1980)。この現象は、まさに自我同一性の危機である。

ところで、定年退職期は、人生後期の主要な転換期である。職業は、人生全般を通じて、個々人の自己意識、社会的役割や社会・経済的地位などとも深く結びついており、個々人の同一性を規定する重要な要である。したがって、定年退職は職業生活の終わりを示し、自我同一

\* 本研究は、文部省昭和57年度科学研究費補助金(総合研究A)「老人カウンセリングの総合的研究」(課題番号00531016)によるものである。

\*\* 旧姓、武則。

\*\*\* 本研究の被験者を依頼するにあたり、広島郵政局のご協力を得たことを記し、感謝いたします。また、本論文をご校閲いただいた、広島大学教育学部教授 鏑幹八郎先生に厚くお礼申し上げます。

\*\*\*\* 広島大学 (Department of Psychology, Faculty of Education, Hiroshima University)

性にとっても重要な節目であると思われる。ところが、定年退職を自我同一性の危機という視点でとらえた実証的研究は、いまだほとんど行われていない。人生後期の転換期の通過のし方は、青年期以前に比べて、さまざまな要因が影響し、その対処のし方も千差万別であろう。このような転換期である定年退職体験は、個々人によってどのような相違が見られるであろうか。また、相違があるならば、それはどのような要因によるのであろうか。

本研究は、定年退職期の心理力動を自我同一性の危機という視点から検討し、以下の点について考察した。まず、研究Ⅰにおいては、定年退職体験が心理的な危機であるか否かに焦点化して、退職の心理的影響や対処のし方の相違を明確化し、これを退職認知タイプとして類型化した。つづいて研究Ⅱでは、研究Ⅰにおいて見出された退職認知タイプを自我同一性ステイタスの視点から分析することにより、退職体験の相違に関連する要因について考察した。

## 研究Ⅰ

### 目的

定年退職期は心理的な危機期であるか否かという観点から、定年退職の心理的影響や対処のし方の相違を検討する。

### 方法

(1)被験者（以下、Ss.と略す。）

中国5県の郵便局に管理者として勤務する男性220名。これらのSs.は、TABLE 1に示した5群に分類した。このうち、退職者群は、ここ2年以内に定年退職した者、未退職者群のうち、第4群の普通郵便局管理者群は、これから2年以内に定年退職をむかえる者である。普通郵便局勤務者は、定年退職の年齢が明確に定められており、いわゆるサラリーマン的なステイタスである。一方、特定郵便局長は、退職年齢は比較的随意であり、60才をこえてなお勤務している者も多くみられる。

TABLE 1 被験者

|           | 群                                     | 人数  | 平均年齢<br>(歳) |
|-----------|---------------------------------------|-----|-------------|
| 退職者群      | 1. 普通郵便局元管理者（再就職者）                    | 51  | 59.2        |
|           | 2.       "                   (再就職未定者) | 18  | 58.6        |
|           | 3. 元特定郵便局長                            | 42  | 62.3        |
| 未群<br>退職者 | 4. 普通郵便局管理者                           | 54  | 57.5        |
|           | 5. 特定郵便局長                             | 55  | 63.9        |
|           | 合       計                             | 220 | 60.3        |

### (2)手続

次のような内容の文章完成法（SCT）による質問紙を作成した。①Erikson (1950) の人格発達分化図式に示された第1～8段階の各心理社会的課題に焦点化したSCT 22項目（刺激項目はTABLE 11に示した。以下、自我同一性SCTと略す。）。②定年退職に対する意識や態度に関するSCT 6項目（例、1. 定年退職は私にとって、2. 定年前、私は退職にそなえて、3. 定年退職後の私の生活は、4. 定年退職後、私は社会と、など）。

質問紙は、郵送によって配布、回収し、回収率は83.3%であった。調査は、1981年6月に行われた。

### (3)反応の評定と分類

#### 1)定年退職認知タイプの分類

定年退職に関するSCT 6項目に対する反応は、以下の2つの観点から分析した。その結果、見出された類型を、定年退職認知タイプと名づけた。

#### ①定年退職が自分に及ぼす影響に対する認知

(Positive-Neutral-Negative)

Positive: 定年退職は自分にとって歓迎すべき好ましいものであると肯定的にとらえられている。

Neutral: 定年退職は単なる「区切り」であり、自分にとって肯定的意味も否定的意味ももっていないととらえられている。

Negative: 定年退職は自分にとって否定的な意味をもっており、自我を脅かすものととらえられている。

#### ②退職や退職生活に対するかかわり方

(Active-Passive)

Active: 定年退職に積極的な関心や姿勢を示し、退職生活にも主体的にかかわろうとしている。

Passive: 定年退職は、自分の力ではどうしようもないものであるという受動的な姿勢を示し、退職生活に対しても主体性が見られない。

#### 2)自我同一性SCTの分析

自我同一性に関するSCT 22項目に対する反応は、内容分析を行うとともに、以下の方法で得点化した。すなわち、Gruen (1964) を参考にして筆者の作成したスコアリングマニュアル (TABLE 11) に基づいて、High (H), Middle (M), Low (L) の3段階に評定し、それぞれ3点 (High) ～1点 (Low) を与えた。

1), 2)の分類および評定は、2名の評定者（そのうち1名は筆者）によって行われ、一致率は、定年退職認知タイプ80.4%, 自我同一性SCT 83.6%であった。

## 結果

### (1)定年退職認知タイプ

定年退職に関する SCT 6 項目を、方法(3)-1)の 2 つの観点から分析したところ、TABLE 2 の 7 つの類型が見出された。

TABLE 2 定年退職認知タイプ

| タイプ         | 退職の心理的影響             | 退職(生活)のかかわり方      | 主な反応例<br>(SCT「定年退職は私にとって」)               | N   |
|-------------|----------------------|-------------------|------------------------------------------|-----|
| A. 積極的歓迎型   | Positive             | Active            | ・人生充実への第1歩である。<br>・第2の人生の出発点である。         | 57  |
| B. 受動的歓迎型   | Positive             | Passive           | ・重荷をおろした感じがする。<br>・気楽になった。               | 43  |
| C. 中立型      | Neutral              | Neutral           | ・1つの区切りにすぎない。<br>・当然のことである。              | 63  |
| D. 危機型      | Negative             | Active            | ・人生の終わり。<br>・人生の墓場である。                   | 29  |
| E. あきらめ型    | やや Negative          | Passive           | ・やむを得ないことであった。<br>・さけることはできない。           | 11  |
| F. 逃避型      | Negative             | Passive           | ・あえて考えないようにしている。<br>・考えたくない。             | 5   |
| G. アンビバレンツ型 | Positive<br>Negative | Active<br>Passive | ・つらくもあるし、楽しくもある。<br>・さびしいが、やれやれという気持である。 | 12  |
| Total       |                      |                   |                                          | 220 |

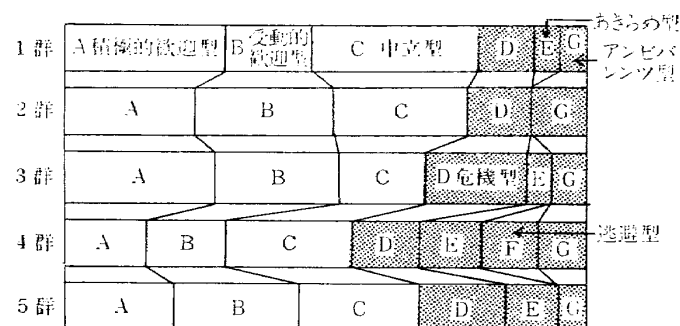


FIG. 1. 各群別の定年退職認知タイプの割合

各々のタイプの概要は、以下のとおりである。

**A 積極的歓迎型：**定年退職は、自分の人生にとって重要な意味をもつものとして主体的にうけとめている。その結果、退職や退職後の人生は好ましいものと認知されており、肯定的にとらえられている。退職後もこれまでの職業生活にかかわる具体的な計画があり、仕事にせよ、個人的な楽しみにせよ、主体的にとりくむ姿勢が示されている。

**B 受動的歓迎型：**A型と同様、定年退職は歓迎されているが、その理由は、A型と異なって、仕事から解放される安堵感や自由が得られるためという受動的なものである。退職生活も、趣味や楽しみを中心とした disengagement 的なものであり、受動的な姿勢が特徴である。

**C 中立型：**定年退職を単なる「区切り」ととらえており、退職は自分にとって重要な意味をもたず、またそれほど大きな影響を及ぼさないと認知している。

**D 危機型：**定年退職は、自分に人生にとって非常に重大なこととして受けとめている。退職は「人生の墓場」

「人生の終わり」であり、自我にとって非常に否定的で脅威的な意味あいをもっている。このタイプの人々は、現役で職業生活が将来にわたって長く続けられることを期待しており、仕事なしの退職後の展望はほとんど持ち得ていない。

**E あきらめ型：**退職は「のがれることのできない事実」として、やむを得ず受け入れている。退職後の生活についても肯定的な意味あいはみられず、受動的な姿勢を示している。

**F 逃避型：**定年退職は自分にとって重大であり、しかも否定的な意味をもつものと認知していながら、それへの対処の仕方を見出せていない。退職後の生活についても、不安定で混乱した姿勢を示している。

**G アンビバレンツ型：**退職は自分にとって重大であるが、はっきりとした一定の認知をもつに至っていない。

## (2) 定年退職の前と後におけるタイプの変化

各 Ss. 群の各々のタイプの占める割合は、FIG. 1 に示したとおりである。これらのタイプのうち、退職を否定的に認知している D～G の 4 型は、A・B の歓迎型、C の中立型に比べて、退職を受け入れることが心理的に困難であると思われる。しかし、D～G の 4 型に属する Ss. は、未退職群では 34.9% であるのに対して、退職群では 17.1% のみであった。この結果より、定年退職による不安定感や否定的な意識は、退職前により強く、現実には退職を経験した後までも、それが意識されている人はかなり少ないことが示唆された。

また、未退職群の中でも、4 普通局群（いわゆるサラリーマン的ステータス）における D～G 型の割合は 42.0% であり、他群に比べて高かった。これは、退職年齢が明確に規定されている普通局管理者は、高齢でも勤務可能であり、比較的随意に退職できる特定郵便局長に比べて、定年退職に不安や脅威を感じやすく退職に否定的な意識をもちやすいことを示していると思われる。

## (3) 各タイプの自我同一性 SCT の特徴

各タイプの自我同一性 SCT のステージ別得点は TABLE 3 に示した。各々の得点についてタイプの要因に関する 1 要因分散分析を行った結果、いずれの得点においても有意な効果が認められた。そこで t 検定を行った結果、TABLE 4 に示したタイプ間の得点に有意差がみられた。TABLE 5 は、これらの有意差に見られたステージの特徴を簡略化して表わしたものである。全般的に A 型は、ほとんどのステージにおいて他型よりも高い得点を示しており、特に B, C, D 型との差異が顕著であった。また、後に考察を加えるように、D 危機型がステージⅣ、およびⅦにおいて他型よりも高い得点を示してい

TABLE 3 各タイプの自我同一性 SCT 得点

| 定年退職<br>認知タイプ     | N  |         | ステージ<br>I    | II           | III          | IV           | V            | VI           | VII          | VIII         |
|-------------------|----|---------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| A積極的<br>歓迎型       | 57 | M<br>SD | 2.25<br>0.60 | 2.54<br>0.58 | 2.25<br>0.52 | 2.63<br>0.54 | 2.54<br>0.51 | 2.38<br>0.62 | 2.38<br>0.62 | 2.38<br>0.68 |
| B受動的<br>歓迎型       | 43 | M<br>SD | 1.84<br>0.81 | 2.11<br>0.71 | 2.16<br>0.57 | 2.63<br>0.67 | 2.21<br>0.70 | 1.84<br>0.75 | 2.11<br>0.84 | 2.21<br>0.84 |
| C中立型              | 63 | M<br>SD | 1.88<br>0.71 | 1.77<br>1.39 | 2.04<br>0.51 | 2.23<br>0.85 | 2.31<br>0.65 | 2.08<br>0.82 | 2.35<br>0.66 | 2.31<br>0.66 |
| D危機型              | 29 | M<br>SD | 1.86<br>0.77 | 2.18<br>0.72 | 2.23<br>0.41 | 2.91<br>0.27 | 2.23<br>0.66 | 2.00<br>0.85 | 2.68<br>0.57 | 2.09<br>0.73 |
| Eあきらめ<br>型        | 11 | M<br>SD | 1.82<br>0.83 | 2.27<br>0.76 | 2.35<br>0.50 | 2.64<br>0.63 | 2.36<br>0.78 | 2.36<br>0.78 | 2.64<br>0.58 | 2.45<br>0.67 |
| F逃避型              | 5  | M<br>SD | 2.00<br>0.83 | 2.00<br>0.63 | 2.40<br>0.49 | 2.40<br>0.80 | 2.20<br>0.75 | 2.20<br>0.75 | 2.60<br>0.49 | 2.60<br>0.49 |
| Gアンビ<br>バレンツ<br>型 | 12 | M<br>SD | 2.00<br>0.82 | 2.25<br>0.60 | 1.92<br>0.64 | 2.08<br>0.96 | 2.50<br>0.65 | 1.83<br>0.70 | 2.58<br>0.65 | 2.33<br>0.86 |

TABLE 4 自我同一性 SCT 得点の各タイプ間の差の検定

|   | A積極的<br>歓迎                                      | B受動的<br>歓迎             | C中立                                   | D危機         | Eあきらめ | F逃避      | Gアンビ<br>バレンツ |
|---|-------------------------------------------------|------------------------|---------------------------------------|-------------|-------|----------|--------------|
| A |                                                 |                        |                                       |             |       |          |              |
| B | I 1.864*<br>II 2.218*<br>V 1.770*<br>VI 2.568** |                        |                                       |             |       |          |              |
| C | I 1.970*<br>II 3.315***<br>VI 1.911*            |                        |                                       |             |       |          |              |
| D | I 1.968*<br>II 1.845*<br>IV 2.045*<br>V 1.687*  | VI-2.568**             | II-1.865*<br>IV-3.522***<br>VI-1.783* |             |       |          |              |
| E |                                                 |                        | II-1.773*                             |             |       |          |              |
| F | II 1.802*                                       |                        |                                       | IV 2.298*   |       |          |              |
| G | IV 2.167*<br>VI 2.320*                          | IV 1.827*<br>II-1.802* |                                       | IV 3.668*** |       | V-1.837* |              |

I～VIIは、ステージ、数字は、t値を表わす。

\*\*\*\*P&lt;.001, \*\*\*P&lt;.005, \*\*P&lt;.01, \*P&lt;.05.

ることは、このタイプの特徴をよく表わしていると思われる。

次に、有意差のみられたステージに関して、各タイプの SCT 反応内容の特徴を検討した。

ステージ I (基本的信頼感 vs. 不信) においては、A積極的歓迎型が B, C, D型に比して有意に高い得点を示した。SCT の反応内容は、特に時間的展望 (将来展望) に関してタイプ間に著しい相違が見られた。A積極的

TABLE 5 各タイプの自我同一性 SCT 得点の特徴図

| タイプ       | ステージ | I | II | III | IV | V | VI | VII | VIII |
|-----------|------|---|----|-----|----|---|----|-----|------|
| A積極的歓迎型   | High | H |    |     | H  | H | H  |     |      |
| B受動的歓迎型   | Low  | L |    |     |    | L | L  | L   |      |
| C中立型      |      | L | L  |     | L  |   |    | L   |      |
| D危機型      |      | L | L  |     | H  |   | L  | H   |      |
| Eあきらめ型    |      |   |    |     |    |   |    |     |      |
| F逃避型      |      |   | L  |     | L  |   |    |     |      |
| Gアンビバレンツ型 |      |   |    |     | L  |   | L  |     |      |

歓迎型は、「(今から10年後、私は) 公職はなくなるが、元気でこつこつと社会に役立つ事に向かって前進したい。」「自分のやりたいことをかなりなしとげているだろう。」など、肯定的で明確な将来展望のもとに、自主的な活動の記述がなされており、自我のエネルギーの強さが感じられる反応が多かった。B受動的歓迎型は、「自適の生活をしているであろう。」「孫の世話をしているであろう。」など、肯定的な将来展望は示されているが、自我のエネルギーのレベルはそれほど高くないと予想される反応が多かった。一方、C型やD型には、「はたして健康でいるだろうか。」「どうしているだろうか。」というやや否定的な将来展望や自信のなさ、将来に対する莫然とした感じを表わした反応、「生きていれば孤独であろう。」という非常に否定的な将来展望や「死んでいるだろう。」という自分の死の記述もみられ、否定的で短い時間的展望をもっていることが示された。

ステージ II (自律性 vs. 恥・疑) においても、A型の得点が B, C, D, F型に比べて有意に高かった。A型の人々では、SCT「人前で意見を述べることは」に対して、「勇気のいることだが、それが自分の仕事の推進に役立った。」「必要であれば積極的に発言する。」「苦にならない。」など、自分自身の意見を持ち、自分の考えを実行することに喜びを感じている反応が特徴的であった。それに対して、得点の低かった B, C, D, F型では、「思ったことの半分も言えない。」「あまり得意でない。つい自分を意識してものを言い、あとで後悔する。」など、自分の考えややり方に対して、自分を意識したり内気になったりする人々が多かった。また、SCT「私の態度やものごとのやり方に対して私は」に対して、A型では、「仕事は主役であれ、脇役であれマイペース」「人間としてあたり前のことをあたり前にしている。」など、自分の態度やものごとのやり方は、自分自身のものであることを示唆する反応が多かった。一方 B, C, D, F型では、「意識してでしゃばらないようにしている。」「こ

れでいいのかと思っている。」など、自己主張を避けたり、他人を意識し、他人と同じように行動したり感じたりしているかを強調した反応が目立った。

ステージⅢ（自主性 vs. 罪悪感）については、各タイプ間に特に明確な相違は見られなかった。

ステージⅣ（勤勉 vs. 劣等感）においては、A型とD型がC、F、G型よりも有意に高い得点を示した。SCT「1つの課題やものごとをやり通すことは私にとって」の項目において、上記のタイプ間の反応に著しい相違が見られた。A・D型の人々は、「生きがいである。」「非常に魅力的なことである。」「最高の喜びであり、誇りでもある。」など、肯定的にとらえている反応が目立ったのに対して、C・F・G型では、「ある程度負担に感じる。」「気力の充実がなかなか問題である。」「心身ともに疲れを感じる。」など消極性が目立ち、否定的にうけとめている反応が多かった。

ステージⅤ（自我同一性の獲得 vs. 同一性拡散）においては、A型とB型の間に有意な相違が認められたのみである。A型の人々は、未退職者、既退職者の別にかかわらず、はっきりと自分の社会的役割を自覚し、それを肯定的に受けとめて喜んでそれらの役割行動をとっていた（例、SCT「私の役割は\_\_\_\_である。それに対して私は\_\_\_\_と感じている。」に対して、「現在の会社のため、自分のために、退職連盟事務の一翼をになうこと、…40年間お世話になった元の職場への恩返しである。」「○○に関する技術開発部長、…やりがいがある。」など）。一方、B型の人々は、自分の役割の定義があいまいであったり、自覚されていない人々が多かった（例、同項目のSCTに対して、「特にない…わずらわしい社会から逃避したい。」「与えられた仕事をするだけ、…不満である。」など）。

ステージⅥ（親密性 vs. 孤独）に関しては、A型が、B、D、G型よりも有意に高い得点を示していた。A型の人々の反応は、配偶者や友人と近い親密な関係をもっており、相互に強い情緒的な結びつきがあることが感じられた。（例、SCT「妻と私は」に対して、「お互いによく理解しあい、仲よく暮らしている。」「力を合わせてすごしてきた。妻の苦労になんとかむくいてやりたい。」；SCT「私は友人と」に対して、「よく酒をのんでは語りあう。」「打てば応える存在である。」「末永くつきあっていきたい。」など）。一方、B、D、G型の反応には、「あまりかかわりをもたない。」「あまり親しくつきあっていない。」など、友人や配偶者から比較的孤立して生活していることを伺わせる反応が多かった。

ステージⅦ（生産性 vs. 停滞）においては、D型が最も

高く、B、C型に比べて、有意に高い得点を示した。SCT「私の仕事は私にとって」に対して、「最適だと思っている。」「生きがいであり闘いでもあった。」「○○事業に一生をささげたことを誇りに思っている。」など、仕事に精力を注ぎ積極的に自分の手腕や能力を用いることによって充実感を得ていることが感じられた。一方、B、C型の人々の反応には、「かなり重荷であった。」「生活の基盤にはなったが性分に合わなかった。」「なんだろう。」「大切なものとはあまり思っていない。」など、仕事に関する不適性感や不満、消極性が目立ち、自分の中で仕事の占める位置が低いことが伺われた。

最後のステージⅧ（自我の統合 vs. 絶望）に関しては、定年退職期には人生の見直しが行われやすいことから、各タイプの反応には相違が見られることが予想されたが、予測に反して特に顕著な差異は見られなかった。

## 考 察

以下にこれまで述べてきた結果を総合して、これらのタイプの心理力動を考察した。本研究で見出された7タイプのうち、A積極的歓迎型、B受動的歓迎型、D危機型は特に顕著な特徴を示していた。D危機型は定年退職を最も否定的に受けとめており、A型とB型は、その心理力動は大きく異なるが、退職を最も肯定的にとらえている。その意味でA、B型とD型は、定年退職が心理的な危機であるか否かに関して両極に位置づけられるタイプである。

結果の(3)で述べたように、D型の人々は、ステージⅦの職業に関するSCTに対して最も高い得点を示した。D型の人々にとって、職業は自分の精力と能力を注ぎこんだ「自分の分身」「かけがえのないもの」であり、まさに自我同一性の中核をなしてきたと考えられる。このタイプの人々がステージⅣの勤勉性に対しても非常に高い得点を示していることは、彼らの仕事に対する熱心さや有能感を示唆していると思われる。このような特徴をもつ人々にとって退職が危機的に受けとめられることは容易に推察できることであろう。

一方、B型の人々は、仕事については消極的であり、人生の中で職業のもつ意味はそれほど大きくない。このタイプの人々は、職業に関してはそれほど主体的で内的な意義を見出さず、むしろ収入を得るためなどの外的な必要性によって仕事には受動的にたずさわってきたと思われる。このタイプの人々にとって同一性の中心は仕事以外のものであったと考えられる。そのため、退職はそれまでの外的な規制から解放される「自由への門」として歓迎されるのであろう。

また、A型の人々はD型と同様に、仕事に対して積極的にとりくみ生きがいを感じており、また、勤勉性や有能感の高さをも示していた。ところが、A型の人々はD型には見られなかったその他のステージについても、全般的に高い得点を示していた。SCT反応内容からも、長い肯定的な将来展望をもち（ステージⅠ）、はっきりとした自分の役割を自覚して主体的にとりくんでおり（ステージⅡ）、また家族や友人とも親密な関係を維持している（ステージⅢ）など、各ステージの課題をうまく達成していることが伺われた。A型の人々が退職に直面して危機的にならず、むしろ退職を肯定的にうけとめていることは、これら各ステージの課題が、達成できていることによって、定年退職後もこれまでの職業生活にかわる主体的な生活を自分で設計することが可能であるためであろう。

本研究の結果によれば、人生後期の主要な転換点と考えられる定年退職も、これを自分にとって重要な意味をもつものとして主体的にとらえ、転換期の意識をもつ人（A、D型）と、単なる1つの区切りと実にあっさりとうけとめる人（C型）が見られた。また、退職に際して、自分の内外の変化にともなう不安定期を主体的に解決し、再び安定に至り得る人（A型）と、長くその不安定な意識をもちつづける人々（D、E、F、G型）とが見られた。

これらの7タイプを自我同一性の危機という観点から考察すると、A・D型は、定年退職を契機に自分の問い直し、すなわち自我同一性の再体制化が行われた（A型）、あるいは、現在も行われている（D型）人々であろう。B型の人々は、これが中途半端に終わっており、C型の人々においては、退職は全く自分の問い直しの契機になっていない。この相違は何によるのであろうか。この問題を検討するために、研究Ⅱを行った。

## 研究Ⅱ

### 問題および目的

研究Ⅰによって、定年退職体験にはいくつかのタイプがあり、同じ定年退職を経験しても、それによって自我同一性の再吟味に至る人とそうでない人がみられることが示唆された。この相違は何によるのかという問題は、人生のどこで自我同一性の再体制化が行われるのかという問題と並んで極めて重要な問題であろうと思われる。

FIG. 2 は、この問題を検討する1つの手がかりとして、自我同一性が再吟味され再び安定していくいくつかのプロセスを、Marcia (1964) の自我同一性ステイタス

論を参考にして仮定したものである。おそらく成人期の同一性ステイタスは、FIG. 2 に示したように、それぞれの時期に遭遇するできごと、すなわち「危機の基盤となる事象」をどう認知し、それをどう解決するか連続によって定められると思われる。

Marcia の4つの同一性ステイタスは、①crisis（意志決定期間）、②commitment（積極的関与）の有無の2点によって定義されている。定年退職期にこれをあてはめると、crisis は定年退職に際しての危機、すなわち、自我同一性の再吟味の体験、commitmentは退職生活への積極的関与を示すと考えられる。

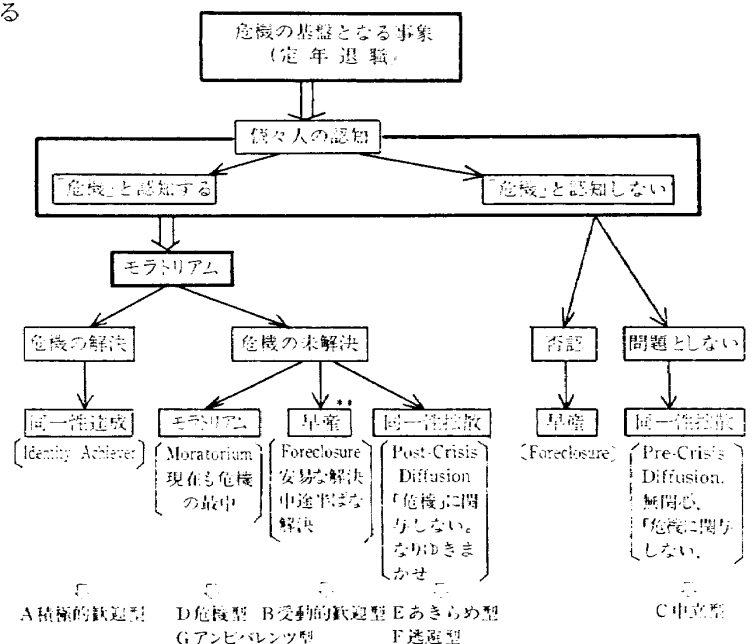


FIG. 2. 成人期の自我同一性再体制化のプロセス\*

TABLE 6 定年退職期の同一性ステイタス

| 自我同一性<br>ステイタス | 定年退職<br>認知タイプ | Crisis<br>(同一性の再吟味<br>と将来の生活への<br>再方向づけ) | Commitment<br>(退職生活への<br>積極的関与) |
|----------------|---------------|------------------------------------------|---------------------------------|
| 1. 同一性達成       | A 積極的達成型      | すでに経験した                                  | している                            |
| 2. モラトリアム      | D 危機型         | 現在、経験中                                   | あいまいである                         |
|                | G アンビバレンツ型    | 現在、経験中                                   | あいまいである                         |
| 3. 早産          | B 受動的達成型      | あいまいである                                  | している                            |
| 4. 危機後拡散       | E あきらめ型       | すでに経験した                                  | あいまいである                         |
|                | F 逃避型         | すでに経験した                                  | していない                           |
| 5. 危機前拡散       | C 中立型         | 経験していない                                  | している／<br>していない                  |

\* Whitbourne (1979) の仮説を筆者の研究にもとづいて加筆・修正した。

\*\* Marcia (1964) の第3のステイタスである Foreclosure は、「早期完了型」と訳されている場合が多いが、筆者は、この型のもつ臨床的特質から「早産型」と訳した。

TABLE 6 は、研究Ⅰの定年退職認知タイプを Marcia にそって分析し直したものである。この分析によって、7タイプは TABLE 6 のように5つのステイタスにまとめられた。

研究Ⅱは、TABLE 6 の同一性ステイタスを、以下の観点から検討し、研究Ⅰで見出された定年退職体験の相違に関連する要因を考察することを目的とした。

1. 同一性ステイタスと、Erikson の人格発達分化図式に示された成人期以前の心理・社会的課題の達成・未達成との関連性。

2. 同様に、自我同一性発達の基盤の1つと考えられる自我機能との関連性。

これらの心理的資質は、青年期のみならず成人期においても、自我同一性の成熟を促し自我同一性の再体制化を導くものであると思われる。高い同一性ステイタスほど、各ステージの心理・社会的課題をうまく達成しており、同時に高い自我機能をそなえていると予測される。

## 方 法

(1)被験者 研究Ⅰに同じ。

(2)手続

以下の内容からなる質問紙を作成した。①Rasmussen (1961) の Ego Identity Scale (以下、E. I. スケールと略す。)を翻訳、標準化した61項目\*。②中西 (1980) の自我機能調査票 (以下、E. F. I. と略す。) 72項目\*\*。なお、この質問紙は、研究Ⅰの質問紙と同時に実施した。

## 結 果

(1)E. I. スケールの分析

TABLE 6 のステイタス別に、E. I. スケールの各ステージの得点および総得点の平均値と標準偏差を算出した。それぞれの得点について、ステイタスの要因に関する1要因分散分析を行った結果、いずれの得点においても有意な効果が認められた。そこでt検定を行った結果、ステージⅣ(勤勉vs. 劣等感)を除く各ステージおよび総得点に有意差がみられた (TABLE 7, 8)。仮説どおり、同一性達成群は他のステイタスよりも有意に高い得点を示していた。また、モラトリアム群は、早産群・拡散群よりも有意に低い得点を示したが、これは仮説に反

する結果であった。早産群、拡散群間には有意差は見られなかった。

この結果は、同一性達成群は、成人期以前のステージの心理・社会的危機を比較的うまく解決してきており、自我同一性がよく確立されていることを示している。反対に、より低いステイタスであるモラトリアム、早産、拡散の各群は、以前のステージに未解決、あるいは不十分な解決の課題を残していることが示唆された。

TABLE 7 各ステイタスのE. I. スケール得点

| 自我同一性ステイタス | N   |         | ステージ<br>I    | II           | III          | IV           | V            | VI           | Total         |
|------------|-----|---------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|
| 1. 同一性達成   | 57  | M<br>SD | 7.53<br>1.44 | 7.09<br>1.57 | 6.54<br>1.46 | 8.46<br>2.00 | 9.61<br>1.47 | 5.67<br>1.92 | 44.89<br>6.27 |
| 2. モラトリアム  | 41  | M<br>SD | 6.24<br>1.87 | 6.02<br>2.07 | 5.70<br>1.95 | 7.78<br>2.37 | 8.20<br>2.56 | 5.05<br>2.26 | 39.00<br>9.68 |
| 3. 早 産     | 43  | M<br>SD | 6.53<br>1.91 | 6.63<br>2.08 | 6.37<br>1.75 | 7.74<br>2.44 | 9.05<br>1.94 | 5.37<br>1.66 | 41.70<br>8.10 |
| 4. 危機後拡散   | 16  | M<br>SD | 6.81<br>1.76 | 7.50<br>1.75 | 6.75<br>1.44 | 8.19<br>3.02 | 8.88<br>2.19 | 6.00<br>1.63 | 44.13<br>9.10 |
| 5. 危機前拡散   | 63  | M<br>SD | 7.10<br>1.95 | 6.98<br>1.67 | 6.17<br>1.81 | 7.94<br>2.19 | 8.68<br>1.90 | 5.56<br>1.82 | 42.43<br>7.82 |
| Total      | 220 | M<br>SD | 6.92<br>1.84 | 6.80<br>1.85 | 6.26<br>1.73 | 8.02<br>2.29 | 8.92<br>2.02 | 5.49<br>1.90 | 42.41<br>8.17 |

TABLE 8 E. I. スケール平均得点の各ステイタス間の差の検定

|   | 1. 同一性達成                                                       | 2. モラトリアム                                         | 3. 早産 | 4. 危機後拡散 | 5. 危機前拡散 |
|---|----------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------|-------|----------|----------|
| 1 |                                                                |                                                   |       |          |          |
| 2 | I 3.68***<br>II 2.86***<br>III 2.38*<br>V 3.51***<br>T 3.60*** |                                                   |       |          |          |
| 3 | I 2.85**<br>T 2.15*                                            | III -1.77†<br>V -1.98*                            |       |          |          |
| 4 |                                                                | II -2.75***<br>IV -2.21*<br>VI -1.76†<br>T -2.18* |       |          |          |
| 5 | V 3.02***<br>T 1.91†                                           | I -2.37*<br>II -2.63***<br>T -2.14*               |       |          |          |

I ~ VI は各ステージ、T は Total、数字は t 値を表わす。

\*\*\*\*P < .001, \*\*\*P < .005, \*\*P < .01, \*P < .05, †P < .10.

(2)E. F. I. の分析

次に、E. F. I. に対する反応を各々のステイタス別に分析した。各ステイタス別の E. F. I. の得点は TABLE 9 に示した。(1)と同様に、1要因分散分析、およびt検定を行った結果、総合・統合機能、現実検討を除く各得点、および総得点に有意差が認められた (TABLE 10)。E. I. スケールの結果と非常によく類似して、E. F. I. においても全般的に同一性達成群が他群よりも有意

\* Rasmussen の E. I. スケールの翻訳、標準化は、筆者らの自我同一性研究班にて行った。この研究の詳細、およびE. I. スケールの日本語版は、鑑幹八郎他(編)1984 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版 pp. 87-91. に掲載されている。

\*\* 中西信男 EF 調査票Ⅱ (1980年度版) 大阪大学人間科学部教育心理学研究室発行。

TABLE 9 各ステイタスのE. F. I. 得点

| 自我同一性<br>ステイタス | N   |         | I<br>総合一<br>統合機能 | II<br>現実感覚    | III<br>衝動統制   | IV<br>対象関係    | V<br>防衛機能     | VI<br>刺激障壁    | VII<br>自律的<br>機能 | VIII<br>現実検討  | Total           |
|----------------|-----|---------|------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|------------------|---------------|-----------------|
| 1. 同一性達成       | 57  | M<br>SD | 32.77<br>3.35    | 37.74<br>2.90 | 28.28<br>3.64 | 33.18<br>3.93 | 31.46<br>3.77 | 32.68<br>4.33 | 30.74<br>4.18    | 36.61<br>3.51 | 263.46<br>20.83 |
| 2. モラトリアム      | 41  | M<br>SD | 32.29<br>3.12    | 35.90<br>4.98 | 26.05<br>4.67 | 31.10<br>3.93 | 29.44<br>5.43 | 29.44<br>6.34 | 27.63<br>5.30    | 36.05<br>3.89 | 247.90<br>27.51 |
| 3. 早 産         | 43  | M<br>SD | 32.67<br>2.83    | 36.88<br>3.60 | 26.26<br>3.50 | 30.95<br>4.28 | 30.91<br>4.43 | 30.40<br>5.18 | 29.35<br>4.05    | 35.77<br>3.32 | 253.19<br>18.75 |
| 4. 危機後拡散       | 16  | M<br>SD | 32.88<br>3.44    | 37.00<br>3.03 | 27.88<br>4.06 | 31.94<br>4.25 | 30.63<br>4.46 | 31.75<br>5.26 | 30.94<br>3.92    | 36.19<br>3.90 | 259.19<br>22.36 |
| 5. 危機前拡散       | 63  | M<br>SD | 32.49<br>2.88    | 37.35<br>3.38 | 27.00<br>3.66 | 31.83<br>3.54 | 31.44<br>3.30 | 31.94<br>4.41 | 29.95<br>3.47    | 36.22<br>4.03 | 258.22<br>17.45 |
| Total          | 220 | M<br>SD | 32.59<br>3.06    | 37.06<br>3.66 | 27.07<br>3.92 | 31.88<br>3.97 | 30.91<br>4.22 | 31.35<br>5.11 | 29.68<br>4.29    | 36.20<br>3.71 | 256.74<br>21.61 |

に高い得点を示しており、モラトリアム群の得点が最も低かった。また、早産群、拡散群間には、有意な差異はみられなかった。この結果より、同一性達成群は他群に比べて全般的に高い自我機能をそなえていることが示された。

TABLE 10 E. F. I. 平均得点の各ステイタス間の差の検定

|   | 1. 同一性達成                                                                                   | 2. モラトリアム                                                     | 3. 早産 | 4. 危機後拡散 | 5. 危機前拡散 |
|---|--------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|-------|----------|----------|
| 1 |                                                                                            |                                                               |       |          |          |
| 2 | II 2.46*<br>III 2.82**<br>IV 2.59**<br>V 2.35*<br>VI 3.16***<br>VII 3.62****<br>T 3.90**** |                                                               |       |          |          |
| 3 | III 2.82**<br>IV 2.81**<br>VI 2.34*<br>VII 1.68†<br>T 2.59*                                | VII -1.88†                                                    |       |          |          |
| 4 |                                                                                            | VII -2.68**<br>T -1.82†                                       |       |          |          |
| 5 | III 1.92†<br>IV 1.97†                                                                      | II -1.98*<br>V -2.39*<br>VI -2.48*<br>VII -2.76**<br>T -2.44* |       |          |          |

I 総合一統合機能 VI 刺激障壁 \*\*\*\* P < .001  
II 現実感覚 VII 自律的機能 \*\*\* P < .005  
III 衝動統制 VIII 現実検討 \*\* P < .01  
IV 対象関係 T Total \* P < .05  
V 防衛機能 数字はt値を表わす † P < .10

## 考 察

E. I. スケール, E. F. I. とともに、同一性達成群 > 早産・拡散群 > モラトリアム群の順に高得点を示した。モラトリアム群の得点が、早産群、拡散群よりも低いという結果は、Marcia (1964) および本研究の仮説に反するも

のであった。これは、Marcia (1964) も述べているように、Rasmussen の E. I. スケールをはじめ、多くの自我同一性質問紙は、自我同一性が達成された時に示される特徴を調べているため、どの程度の同一性が達成されたかを明確に把握できるような「心

理・社会的基準」が不明瞭であるという弊害によるものと思われる。すなわち、TABLE 6 に示したように、早産群は、自我同一性の再吟味は中途半端にすまされているが、現実生活への積極的関与は十分になされていることから、質問紙形式の調査では同一性達成群と同程度に同一性が達成されていると判断されやすいと考えられる。同様に、本研究の拡散群79名のうち、63名は、危機前拡散群である中立型であった。このタイプの人々の中にも、定年退職にともなう同一性の再吟味は全く行われていないにもかかわらず、退職生活への関与はなされている人々がみられたが、これらの人々も高得点を示す可能性が高いと考えられる。一方、本研究のモラトリアム群（D危機型、Gアンビバレンツ型）は、現在、危機（同一性の再吟味）のさ中にあることから、退職生活への積極的関与の程度はかなり低いため、同一性が達成された時にあらわれる特徴の有無に焦点化しているE. I. スケールの得点はかなり低くなったと推測される。

早産群、拡散群の得点が、モラトリアム群よりも高かったという結果は、このように質問紙調査では同一性が達成されるプロセスは問題にされず、現在の状態にしか焦点化できないという欠点によるものと考えられる。これは、Marcia (1964) の同一性ステイタス研究の発端となった問題でもあり、これらの弊害は、面接調査などによって補っていく必要があると思われる。

青年期以降の自我同一性は、成人期のさまざまな時期に遭遇する自分の問い直し（自我同一性の再吟味と将来展望の再方向づけ）を促す事象をどう認知し、この危機をどう解決するかによって成熟していくと考えられる。FIG. 2 に示したように、これらのさまざまな事象を契機に自分の問い直しを行い（「危機」を体験し）、その解決に達し得た者が自我同一性達成者と呼ぶことができる。換言すれば、自我同一性達成者は、「危機」を認知し、それを解決する力をそなえた者であると考えられ



TABLE 11 自我同一性 SCT スコアリングマニュアル

| ステージ | 課題                      | 概 要              | SCT刺激項目                                                                                                                                | 評 定                                       | 反 応 内 容                                                                                                                                                                                                                   |
|------|-------------------------|------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| I    | 基本的信頼感<br>VS<br>不信      | Highest Point(H) | 友人や家族などに好意をもち、信頼していることを示す記述をしている。将来に対して肯定的であり、希望をもっている。                                                                                |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         | Lowest Point(L)  | 人間、友人、同僚に不信感をもっていることを示す記述。友人との交際はトラブルのもとだとし、1人であることを好む。否定的、受動的な将来展望。                                                                   |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         |                  | 1. 私は、家族や友人を、<br>2. 今から10年後、私は、<br>3. 私は、これからの人生を、                                                                                     | H<br>M<br>L                               | ・自分のやりたいことをかなりなしとげているだろう。<br>・まだ広島に住んでいるだろうか。<br>・生きていれば孤独であろう。<br>・あの世にいると思う。                                                                                                                                            |
| II   | 自律性<br>VS<br>恥・疑        | H                | 自分自身の意見をもち、自分の考えを実行することに喜びを感じている。自分の態度やものごとのやり方は、自分自身のものであり、必ずしも他人の期待にそった習慣や先例に従ったものではない。                                              |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         | L                | 自分の考えややり方に対して非常に自分を意識したり内気になったりする。自己主張をさけ、どれだけ他人と同じように自分が行動し、感じているかを強調している。                                                            | H<br>M<br>L                               | ・仕事は主役であれ脇役であれマイペース。<br>・人間として、あたり前のことをあたり前にしている。<br>・改めるべきところは改める。<br>・意識してでしゃばらないようにしている。<br>・これでいいのかと思っている。                                                                                                            |
|      |                         |                  | 4. 人前で意見をのべることは、<br>5. 私の家族や友人は、私の態度やものごとのやり方に対して、<br>それについて私は、                                                                        | H<br>M<br>L                               | ・楽しい。・本気で真剣に考える。<br>・正確であることが大切だと思う。<br>・調査をする。<br>・明日は明日の風がふくと思い無計画。                                                                                                                                                     |
| III  | 自主性<br>VS<br>罪悪感        | H                | 自分の生活や仕事に主体性をもっており、それに喜びを感じている。自律性においてではなく、自分の内的動機にもとづく活動をすすんで行ない、楽しんでいる。                                                              |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         | L                | 物事をなしとげることをあまり重要視しておらず、自分の努力や試みはくつがえされたり失敗するだろうと感じている。主体性が乏しく他人にものごとを始めさせる。                                                            | H<br>M<br>L                               | ・喜びである。・生きがいを感じる。<br>・人生の証と考える。<br>・仕事として当然だ。<br>・苦痛以外の何物でもない。<br>・苦しいことである。                                                                                                                                              |
|      |                         |                  | 6. 自分の生活や仕事の計画をたてる時、私は、<br>7. 私は、自分の育ちについて、<br>8. 私が生きている喜びを感じるのは、<br>9. 私の趣味は、それについて私は、<br>10. 一つの課題やものごとをやりとすことは、私にとって、              | H<br>M<br>L                               | ・立派な職員を養成すること。一生生きがい、誇りに感じている。<br>・家族の生活維持——義務だと思っている。<br>・与えられた仕事をするだけ——不満である。<br>・今もってわからない——課題だと思ってる。                                                                                                                  |
| IV   | 勤 勉<br>VS<br>劣等感        | H                | 物を作ったり、完成するまでやりおとすことが好きである。自分の活動、仕事、趣味に対する能力(腕前)があると感じており、自分がしてきたこと、作ったものに対して、誇りをもっている。                                                |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         | L                | 何かを生産したり、仕事にたずさわったりする能力に欠けていると感じている。課題や物事になかなか着手することができず、受動的である。                                                                       | H<br>M<br>L                               | ・人づくりというやりがいのある仕事だから。<br>・将来の生活の安定をはかる。<br>・職業が安定している。<br>・なんとなく。・理由なし。                                                                                                                                                   |
|      |                         |                  | 11. 私の役割は、それについて私は、<br>12. 私は、という理由で、自分の職業を選んだ。<br>13. 私という人間は、<br>14. 私が一生のうちにやろうとしていることは、<br>15. 私は、現在自分のしている仕事に対して、                 | H<br>M<br>L                               | 略                                                                                                                                                                                                                         |
| V    | 自我同一性の獲得<br>VS<br>同一性拡散 | L                | はっきりと自分の社会的役割を定義し、それに精通し、喜んでそれらの役割行動をとっている。集団への所属感、自分の生活や活動について安心感があり、自分が何者であるか、はっきりと確信している。過去と現在の自分に一貫性、連続性がある。                       |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         |                  | 16. 妻(夫)と私は、<br>17. 私は友人と、<br>18. 私の仕事は、私にとって、<br>19. 子供を育てることは私にとって、<br>20. 私は自分の一生をふり返ってみて、<br>21. 死に対して私は、<br>22. 私は、自分のしてきた仕事に対して、 | H<br>M<br>L<br>H<br>M<br>L<br>H<br>M<br>L | ・互いに助けあって生きている。<br>・円満でうまくいっている。<br>・世間なみ。・ぶつうにやっている。<br>・該当なし。<br>・家族以上の仲である。<br>・信頼できる仲である。<br>・ぶつうのつきあいをしている。<br>・呼べる友をもたない。<br>・うまくいっていない。<br>・かけがえのないもの。<br>・ここまでくれば分身。<br>・生活のもとで。<br>・特にこれといったものではない。<br>・おもしろくない。 |
|      |                         |                  | 23. 私は自分の生活や必要なこと以外は何かせず、退屈で単調な無変化の生活を送っているようにみえる。子供、家族または、外での活動などに積極的でない。                                                             |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
| VI   | 親密性<br>VS<br>孤独         | H                | 配偶者や友人と、近い親密な関係をもっている(思想、考えをわけあう。時をともに過ごす。暖かい感情を表現するetc)。相互に強い情緒的な結びつきがある。                                                             |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         | L                | 友人、配偶者、子供達から比較的孤立して生活している。他人と親密な感情を基盤にした関係をもつことをさけている。自分自身に関心や精力をうばわれているか、見きかいなくやたらに社交的である。対人関係はステレオタイプ、あるいは形式的である。                    | H<br>M<br>L                               | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         |                  | 24. 自分の手帳や能力を用い、周囲からも支持された将来の計画をもっている。単なる順応ではなく、自分の仕事、活動に精力を注ぐことによって、自分の永続性を示している。子供の成長、教育に積極的な関心を示している。                               |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
| VII  | 生産性<br>VS<br>停滞         | H                | 日々のおきまりの仕事や必要のことの他は何もせず、退屈で単調な無変化の生活を送っているようにみえる。子供、家族または、外での活動などに積極的でない。                                                              |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         | L                | 自分の生活、仕事や、自分のなしとげたことに満足し、幸福感をいだいている。自分の人生に対する責任をうけ入れている。                                                                               | H<br>M<br>L                               | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         |                  | 25. 死に対して私は、<br>26. 私は、自分のしてきた仕事に対して、                                                                                                  | H<br>M<br>L                               | 略                                                                                                                                                                                                                         |
| VIII | 自我の統合<br>VS<br>絶望       | H                | 自分の人生は失敗だったと感じ、もう一度チャンスがあるなら、自分の人生、仕事などをかえたいと思っている。老いや死に対して恐怖感をもっている。                                                                  |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         | L                | 自分の人生は失敗だったと感じ、もう一度チャンスがあるなら、自分の人生、仕事などをかえたいと思っている。老いや死に対して恐怖感をもっている。                                                                  |                                           | 略                                                                                                                                                                                                                         |
|      |                         |                  | 27. 私は自分の一生をふり返ってみて、<br>28. 死に対して私は、<br>29. 私は、自分のしてきた仕事に対して、                                                                          | H<br>M<br>L                               | 略                                                                                                                                                                                                                         |

る。本研究によれば、同一性達成群（研究Ⅰ：A積極的歓迎型）の人々は、他群に比べて自我同一性得点が高く、成人期以前の心理・社会的課題をよく達していること（E. I. スケールより）と、基本的な自我の強さをそなえていること（E. F. I. より）が明らかにされた。これら同一性達成度の高さ、および自我機能の高さは、上に述べた「危機を認知し、それを解決する力」を示唆していると思われる。Erikson (1964)によれば、人生における「発達の危機」とは、人格発達における岐路、すなわち、退行の方向へも成熟の方向へも進み得る分れ目という意味を含んでいる。同一性達成群の人々にみられたように、この岐路にさしかかった時、破局的にならず、さらに自我同一性の再体制化の方向に進み得る力は、自我同一性の達成度や基本的な自我の強さに関連性を有していると考えられる。

また、本研究のSs.のうち、危機前拡散群（研究Ⅰ：C中立型）に分類された人々が、28.6%を占めていることは興味深い。彼らは、定年退職を「単なる1つの区切りにすぎない」ととらえ、自己意識にはほとんど変化がみられない。研究Ⅰで述べたように、C中立型の人々は、B型と同様に自分にとって職業のもつ意味はかなり低いことから、退職もまたそれほど重大であるとは受けとれないと推察される。しかしながら、このタイプの人々は、「危機を認知する力（自我同一性の再吟味を行う力）」を欠いているとも考えられる。すなわち、このタイプの人々には、人生の危機や節目の意識をほとんどもたず、自我同一性の問題は棚上げにして生涯をすごす人が多いと思われる。このタイプの示す特徴についても、今後さらに考察を深めていく必要がある。

#### 引用文献

- Donovan, J. M. 1975 Identity status and interpersonal style. *Journal of Youth and Adolescence*, 4, 37-55.
- Donovan, J. M. 1975 Identity status: Its relationship to Rorschach performance and daily life pattern. *Adolescence*, 10, 29-44.
- エリクソン 仁科弥生 (訳) 1977, 1980 幼児期と社会, 1, 2. みすず書房  
(Erikson, E. H. 1950 Childhood and society. New York: W. W. Norton & Company.)
- エリクソン 鑑幹八郎 (訳) 1971 洞察と責任 誠信書房  
(Erikson, E. H. 1964 Insight and responsibility. New York: W. W. Norton & Company.)
- Gould, R. 1978 Transformations: Growth and change in adult life. New York: Simon & Schuster.
- Gruen, W. 1964 Adult personality: An empirical study of Erikson's theory of ego development. In B. L. Neugarten (Ed.) 1964 Personality in middle and late life. New York: Atherton Press, Prentice Hall.
- レビンソン 南 博 (訳) 1980 人生の四季 講談社  
(Levinson, D. J. 1978 The seasons of a man's life. New York: Alfred A. Knopf.)
- Lowenthal, M. F. 1975 Four stages of life: A comparative study of women and men facing transitions. San Francisco: Josey-Bass Publishers.
- Marcia, J. E. 1964 Determination and construct validity of ego identity status. Unpublished doctoral dissertation, The Ohio State University.
- Marcia, J. E. 1976 Identity six year after: A follow-up study. *Journal of Youth and Adolescence*, 5, 145-160.
- 中西信男 1980 自我機能調査票 (E. F. Inventory) の研究Ⅱ 日本相談学会第13回大会発表
- 中西信男 1980 E. F. 調査票Ⅱ (1980年度版) 大阪大学人間科学部教育心理学研究室
- Rasmussen, J. E. 1961 An experimental approach to the concept of ego identity as related to character disorder. Unpublished doctoral dissertation, The American University.
- 武則祐子 1980 中年期における自我同一性に関する発達危機論的考察 広島大学大学院教育学研究科修士論文抄, 140-144.
- 鑑幹八郎・山本力・宮下一博 (編) 1984 青年期シンポジウム 3 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版
- Vaillant, G. E. 1977 Adaptation to life. Boston: Little, Brown & Company.
- Whitbourne, S. K. 1979 Adult development: The differentiation of experience. New York: Holt, Rinehart & Winston.

(1985年3月5日受稿)